

雜餉隈遺跡 3

～ 第4次調査～

大野城市文化財調査報告書 第207集

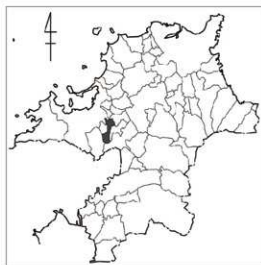
2023

大野城市

ざつ しよの くま
雑餉隈遺跡 3

～ 第4次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第207集



2023

大野城市

序文

大野城市は福岡平野の南部に位置し、西暦 665 年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた街です。

雑餉隈遺跡は、市域の北部に位置する江戸時代の遺跡です。この地は、江戸時代に整備された博多と日田をつなぐ「日田街道」沿いにあたり、宿場である博多と二日市の中間に位置する「^{あい}間の^{しゆく}宿」として栄え、茶店や旅籠が軒を連ねていたと伝えられています。

今回報告する調査地では、日田街道沿いを流れていた運河である「新川」を確認しました。江戸時代の賑わいや、人々の暮らしを伝える多くの遺物が出土し、当遺跡の重要性を示す成果となっています。

本書が学術研究はもとより、地域の歴史や文化財の理解と認識を深める一助となり広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり多大なるご指導を賜りました関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和5年3月31日

大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

例言

1. 本書は、大野城市錦町1丁目17番1・3で計画される住宅建設に伴う事前の発掘調査として実施した雑餉隈遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は大野城市教育委員会が主体となり、株式会社オープンハウスディベロップメント代表取締役福岡良介氏の委託を受け実施した。
3. 発掘調査は齋藤明日香が担当した。
4. 遺構実測及び地形測量は、齋藤が行った。
5. 遺構写真は齋藤が撮影した。
6. 遺物写真は(株)写測エンジニアリングに委託し、牛嶋茂が撮影した。
7. 遺物実測は小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江が行った。
8. 遺物拓本は小畑、篠田が行った。
9. 遺構図製図・遺物図製図は齋藤、小嶋が行った。
10. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
11. 本書図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）による。
12. 本書の第1図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『不入道』を使用した。
13. 本書に掲載の出土遺物・実測図・写真は、大野城市が保管・管理している。
14. 本書の執筆・編集は齋藤が行った。
15. 執筆に関しては、朝岡俊也氏の協力を得た。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	6
2. 遺構	8
3. 出土遺物	9
IV. 総括	
(1) 各調査地点の様相	19
(2) 新川と集落景観	19
(3) 第3次調査で確認された落ち込みと平坦面の位置づけ	20

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	5
第2図 遺構配置図 (1/80)	6
第3図 調査地点位置図 (1/2,000)	7
第4図 SD02・SX01 土層実測図 (1/40)	8
第5図 SD01 土層実測図 (1/50)	9
第6図 SD01 出土遺物実測図① (1/3)	10
第7図 SD01 出土遺物実測図② (1/3)	11
第8図 SD01 出土遺物実測図③ (1/3)	12
第9図 SD01 出土遺物実測図④ (1/3)	13
第10図 SD01 出土遺物実測図⑤ (1/3)	14
第11図 SD01 出土遺物実測図⑥ (1/3、1/4)	15
第12図 SD02 出土遺物実測図 (1/3)	16
第13図 昭和初期ごろの雑餉隈町・山田・筒井の町並と調査地点	20

表目次

第1表 遺物観察表①	17
第2表 遺物観察表②	18

図版目次

- 図版1 (1) SD01 掘削状況(北から) (2) SD01 掘削状況(北から)
(3) SD01 木杭検出状況(北から)
- 図版2 (1) SD01 掘削状況(北から) (2) SD02・SX01 土層(南から)
(3) 御茶屋門柱現存状況(北から)
- 図版3 出土遺物
- 図版4 SD01 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

雑餉隈遺跡は、大野城市雑餉隈町3丁目、山田4丁目、錦町1丁目、筒井1丁目にかけて広がる主に近世の遺跡である。1988年以降、3回にわたる発掘調査が実施され、今回報告するのが第4次調査である。

調査地は錦町1丁目17番1・3で、周知の埋蔵文化財包蔵地「雑餉隈遺跡」の範囲内にあたる。埋蔵文化財の照会を受け、令和3（2021）年9月24日に確認調査を実施したところ、現地表下70cmの深さで遺構が確認された。

事業者は当該地に建売住宅を建設する予定であり、今回の工事では5区画のうち3区画の建築を行う計画である。このうち1区画については柱状改良を行う計画であり、計画通りに工事が施工されると建物部分に関しては遺構の破壊が確実で、その他の部分に関しても保護層の確保が困難であるため、発掘調査が必要と判断された。事業者からの計画予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和3（2021）年11月16日付で発掘調査の指示が出された。また、令和3年11月5日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が提出された。

これを受け、令和3年12月2日から同年12月24日にかけて発掘調査を実施した。調査対象面積は70㎡である。整理作業については、令和4（2022）年度に実施した。なお、発掘調査および整理作業に関する費用は、事業者と市が折半した。

2. 調査組織

令和3年度から令和4年度における発掘調査及び整理体制は以下の通りである。

令和3年度（発掘調査）

教育長	吉富 修（～6月）	伊藤 啓二（7月～）
教育部長	日野 和弘	
ふるさと文化財課長	石木 秀啓	
係長	林 潤也	上田 龍児
主査	徳本 洋一	
主任主事	秋穂 敏明	
主任技師	山元 瞭平	
技師	齋藤 明日香	
主事	鮫島 由佳	
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	石川 健（12月～）
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子	深町 美佳
会計年度任用職員（庶務）	三好 りさ	光原 乃里子（～9月） 野上 知則（11月～）
	山上 敬子	井之口 彩子

令和4年度（整理作業）

市長	井本 宗司		
地域創造部長	増山 竜彦		
大野城市心のふるさと館館長	赤司 善彦		
文化財担当課長	石木 秀啓		
係長	林 潤也	上田 龍児	
主査	徳本 洋一		
主任主事	秋穂 敏明		
主任技師	山元 瞭平		
技師	齋藤 明日香		
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	石川 健	
会計年度任用職員（啓発）	山村 智子	深町 美佳	照屋 真澄（8月～）
会計年度任用職員（庶務）	清水 康彰	大塚 健三（7月～）	
	山上 敬子	井之口 彩子	

発掘調査作業員（令和3年度）

安部 芳範	井上 光江	金子 伸子	田代 薫	綱嶋 年朗	仁田 幸男
武藤 マリ子					

整理作業員

小畑 貴子	古賀 栄子	小嶋 のり子	篠田 千恵子	白井 典子
津田 りえ	仲村 美幸	氷室 優	松本 友里江	

Ⅱ. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市は福岡平野の南部に位置し、南北に細長く中央部がくびれた形を呈する。市域北東部には、三郡山系の大城山や乙金山、南西部には、牛頸山とそれから派生する低丘陵が広がる。市域中央には、御笠川が貫流し、河川堆積によって形成された平野部は福岡平野の一角をなしている。牛頸山北麓から北側低丘陵にかけては、御笠川の支流である牛頸川と、牛頸川の支流である平野川の開析作用によって無数の谷がつくられ、複雑な地形を形成している。

地質学的には、山地は早良型花崗岩からなり、平野部は縄文時代に形成された砂礫層(住吉層)が広がっている。また、一部 Aso-4 火砕流堆積物が分布しており、雑餉隈遺跡は Aso-4 火砕流堆積物に起因する微高地を中心に展開しており、本調査地は微高地の縁辺部に位置する。

2. 歴史的環境

大野城市では、旧石器時代から近代にかけての遺構が多数確認されている。ここでは、雑餉隈遺跡の所在する市域北部を中心に、周辺遺跡を概観したい。

旧石器時代 釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、松葉園遺跡、薬師の森遺跡において、細石刃やナイフ形石器、角錐状石器などが確認されている。大城山から西に派生する丘陵上で生活の痕跡が認められる。

縄文時代 市域で草創期の遺構・遺物は確認されていない。早期になると遺跡数が増加し、釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、本堂遺跡などの丘陵上で押型土器や石器が出土しているほか、石勺遺跡といった沖積平野の微高地にも遺跡が展開する。前期から中期にかけての遺跡は市域では確認されていない。後・晩期の遺跡としては、市域南部に所在する牛頸塚原遺跡や日ノ浦遺跡において、竪穴住居や土坑が確認されている。

弥生時代 弥生時代に入ると福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が展開していく。前期は、川原遺跡や仲島遺跡で集落跡が確認されているが、小規模である。御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡などの丘陵地に墳墓遺跡が集中する。中期に入ると、中・寺尾遺跡、森園遺跡といった丘陵地だけでなく、石勺遺跡や仲島遺跡、ヒケシマ遺跡といった平野部にも遺跡が展開する。周辺では、春日丘陵に大規模な集落・墳墓が展開し、多量の副葬品をともなう「王墓」と称される喪棺墓も見つかっている。後期になると、中期の遺跡が継続するほか、榎町遺跡や村下遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布や青銅器銚型などが出土しており、拠点的な集落となる。周辺では青銅器やガラス製品を生産した遺跡が集中し、「奴国」の中心的地域と考えられている。

古墳時代 前期の集落遺跡として、石勺遺跡や仲島遺跡、村下遺跡などが確認されており、いずれも弥生時代後期から継続するものである。市域北部の古墳は、乙金山・四王寺山の西側丘陵に築造される。御陵古墳群において、箱式石棺や割竹形木棺を主体部とする円墳が確認されている。中期の集落遺跡は、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、原田遺跡などで確認されている。古墳

は円墳の笹原古墳、帆立貝式前方後円墳の成屋形古墳が築造される。後期に入ると、乙金山・四王寺山の麓に、大城山古墳群や善一田古墳群といった大規模な群集墳が展開する。また、乙金山西麓にも上唐山古墳群が展開する。集落としては、薬師の森遺跡が確認されており、古墳群と対応する集落である。鉄器生産や須恵器生産といった手工業生産に関わる集落として注目されている。また市域北部では、乙金窯跡や雉子ヶ尾窯跡が操業するが、いずれも小規模な生産にとどまっている。

飛鳥時代 7世紀前半代は、集落・墳墓ともに古墳時代の様相を踏襲する。この時期を代表する大型円墳として、今里不動古墳があげられる。乙金山・四王寺山麓における群集墳は、7世紀前半に最盛期を迎えると、次第に築造数が減少する。7世紀後半に入ると、白村江の戦いで敗戦したことをきっかけに、水城跡・大野城跡が相次いで築造される。国内では壬申の乱が起こり、律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していく変革期となる。

奈良～平安時代 奈良時代になると律令国家の成立に伴い、大宰府を中心とした支配体制が整う。水城から博多方面に通じる東西2本の官道も整備され、官道沿いでは仲島遺跡や井相田C遺跡などで大規模な集落が確認されている。市域南部の牛頭窯跡群では、8世紀前半に窯の数が増加し、小型器種を中心に大量生産が行われる。平安時代に入ると遺跡数が減少し、牛頭窯跡群も9世紀中ごろには操業を停止する。11世紀後半には大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、博多を中心とした貿易都市が形成される。

鎌倉～戦国時代 市域では御笠の森遺跡、薬師の森遺跡などで当該期の遺構が確認されている。御笠の森遺跡では、多数の方形区画溝が確認されている。薬師の森遺跡では、集落を囲む区画溝や建物群、水田などが確認され、中世墓も多数検出されている。なお、市域北部にある唐山城は戦国時代の山城であるが、未調査のため詳細は不明である。

近世～近現代 後原遺跡や雑餉隈遺跡などで当該期の遺構・遺物が確認されている。雑餉隈遺跡では本調査において、新川と呼ばれる運河の東岸を確認した。また、原口遺跡や古野遺跡、薬師の森遺跡で近世墓が検出されている。近現代の遺構としては、王城山遺跡や古野遺跡などで、太平洋戦争時の防空壕が見つかっている。



- | | | | | | |
|-----------------|-----------------|------------|-------------|-------------|-----------------|
| 宇美町 | 13. 持田ヶ浦古墳群 E 群 | 27. 唐山道跡 | 42. 巖山道跡 | 57. 川原道跡 | 71. 裏ノ田道跡 |
| 1. 岩長浦古墳群 | 14. 持田ヶ浦古墳群 F 群 | 28. 乙金北古墳群 | 43. 雉ヶ尾道跡 | 58. 御笠の森道跡 | 春日市 |
| 2. 観音浦古墳群 | 15. 今里不動古墳 | 29. 上唐山道跡 | 44. 雉ヶ尾道跡 | 59. 宝松道跡 | 72. 鞍河 E 道跡 |
| 3. 正藏古墳群 | 16. 金隈道跡群 | 30. 善一田道跡 | 45. 雉ヶ尾古墳 | 60. 雑駘限道跡 | 73. 鞍河 B 道跡 |
| 4. 内野谷古墳群 | 17. 丸山古墳 | 31. 乙金部跡 | 46. 原門道跡 | 61. 村下道跡 | 74. 原ノ口道跡 |
| 志免町 | 18. 影ヶ浦古墳群 | 32. 王城山道跡 | 47. 金山道跡 | 62. 石ノ道跡 | 75. 鞍河 D 道跡 |
| 5. 坂ヶ丘古墳群 | 19. 堀ヶ浦古墳群 | 33. 古野道跡 | 48. 原田道跡 | 63. 堀池道跡 | 76. 鞍河 A 道跡 |
| 福岡市 | 20. 井相田 C 道跡群 | 34. 原口道跡 | 49. 曲り目道跡 | 64. 因分田道跡 | 77. 先ノ原 B 道跡 |
| 6. 立花寺道跡群 | 21. 実野 C 道跡 | 35. 此岡古墳群 | 50. 釜蓋原道跡 | 65. 原ノ畑道跡 | 78. 立石道跡 |
| 7. 金剛山古墳群 | 22. 雑駘限道跡群 | 36. 薬師の森道跡 | 51. 沙井川道跡 | 66. 後原道跡 | 79. 先ノ原・春日公園内道跡 |
| 8. 七曲古墳群 | 大野城市 | 37. 松葉園道跡 | 52. 中ノ原道跡 | 太宰府市 | |
| 9. 持田ヶ浦古墳群 A 群 | 23. 御陵脇道跡 | 38. 森園道跡 | 53. 金ヶ浦道跡 | 67. 成屋形道跡群 | |
| 10. 持田ヶ浦古墳群 B 群 | 24. 塚口道跡 | 39. 中ノ寺尾道跡 | 54. 狭原古墳 | 68. 成屋形古墳 | |
| 11. 持田ヶ浦古墳群 C 群 | 25. 御陵道跡 | 40. ヒケシマ道跡 | 55. 神島本間尺道跡 | 69. 裏ノ田道跡 | |
| 12. 持田ヶ浦古墳群 D 群 | 26. 御陵前ノ檢道跡 | 41. 榎町道跡 | 56. 神島道跡 | 70. 裏ノ田古墳 | |

第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

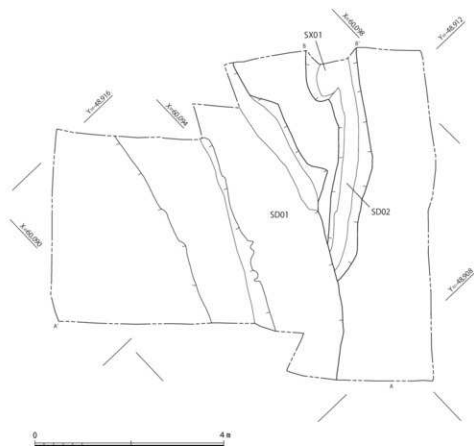
Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の概要

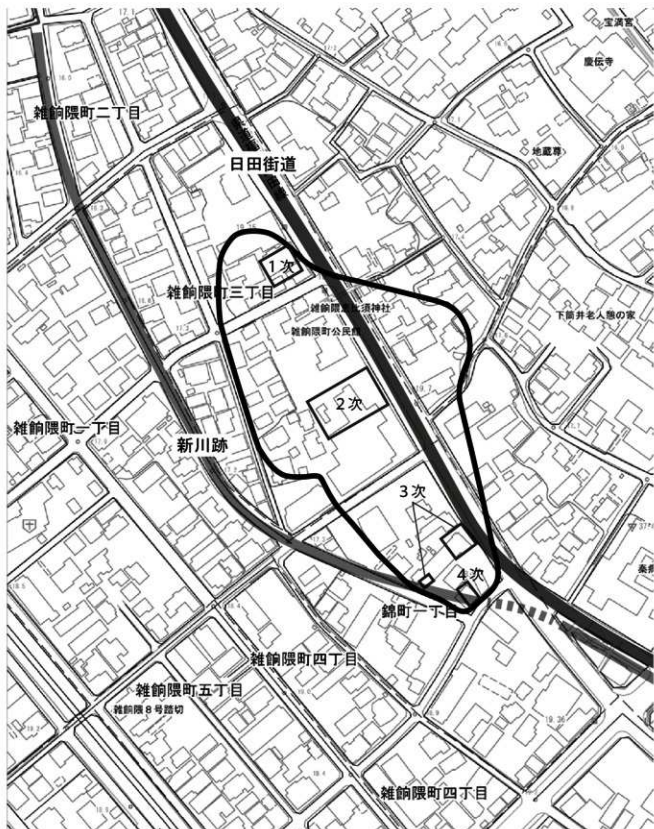
雑餉隈遺跡は、Aso-4 火砕流堆積物に起因する微高地を中心に展開し、今回の調査地はこの微高地の縁辺部に位置する。これまで3次におよぶ調査を実施し、近世を中心とする遺構を確認している。

調査対象地は、標高 18 m 前後の平坦な土地で、調査前は宅地として利用されていた。調査期間は令和 3（2021）年 12 月 2 日から同年 12 月 24 日までで、調査面積は約 70㎡である。

遺構面は、客土（40～50cm）を除去した後確認した。砂質土を基本とし、部分的に粘質土の堆積が認められる。調査対象地は、江戸時代の運河である新川跡想定地にあたるため、新川跡を確認することが大きな目的であった。



第2図 遺構配置図 (1/80)



第3図 調査地点位置図 (1/2,000)

2. 遺構

(1) 溝跡

SD01 (第2・5図、図版1・2)

調査区の西側で検出した大溝で、東側の肩から溝底付近にかけて確認することができた。長さ6m以上、幅5.9m以上を測りさらに調査区外へ続くものである。深さ1mを超えると湧水してきたこともあり、1mより深い部分に関しては、安全対策のために重機で掘削を実施した。溝底を検出することはできなかったが、深さは3m以上を測る。深さ1mほどまでは緩やかに傾斜し、そこから幅1mほどの平坦面を造りだしている。平坦面直上には厚さ約8cmの砂質土が堆積しており、硬くしまっていたことから意図的に敷いたものと考えられる。平坦面から溝底にかけての傾斜は急な勾配となる。また、深さ1.5mほどのところで木杭を検出した。

土層は、2層を上層、3・4層を中層、5層以下を下層とした。大溝の埋没状況を観察すると、いったん平坦面と同じレベルまで埋め戻し、その後大溝の肩のレベルまで埋め戻していることがわかった。最後に全体を平らに整地するように、上層の土層が堆積している。なお、雑餉隈遺跡第3次調査の補足調査で確認された大形の落ち込みは、一連の大溝であると考えられる。

遺物は、上・中・下層で取り上げた。埋土からは、陶磁器・瓦・木製品が出土した。特に木製品は、下層から多量に出土した。

SD02 (第2・4図、図版2)

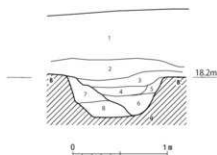
調査区の北から南にかけてのびる溝で、SD01に切られる。長さ4.4m以上、幅0.6m、深さ0.4mを測る。底面は北に比べて南がやや低いことから、水路とするならば北から南方向へ導水し、SD01と接続させていた可能性が高い。

埋土からは、陶磁器や瓦が出土した。

(2) 土坑

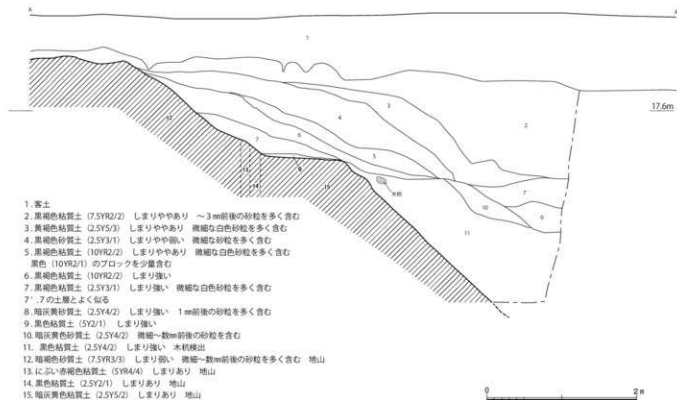
SX01 (第4図・図版2)

調査区北端で検出した。当初SD02として掘り進めており、土層観察の結果、土坑であることを確認した。SD02に切られるもので、出土遺物がなく詳細は不明である。



1. 客土
2. 黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) しまりややあり ~3m前後の砂粒を多く含む
3. 黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) しまりややあり ~1m前後の砂粒を含む
- オリーブ褐色 (2.5Y4/4) のブロックを含む
4. 黒褐色砂質土 (10YR3/1) しまり強い 微細な砂粒を多く含む
5. 灰い青褐色土 (10YR4/3) しまりややあり 微細な砂粒を多く含む
6. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) しまり強い 微細な砂粒を含む
7. 暗褐色粘質土 (10YR3/4) しまり強い 微細な砂粒を含む 土坑の埋土
8. 褐色砂質土 (10YR4/4) しまり弱い ~1m前後の砂粒を多く含む 土坑の埋土
9. 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) しまり強い ~1m前後の砂粒を多く含む 地山

第4図 SD02・SX01 土層実測図 (1/40)



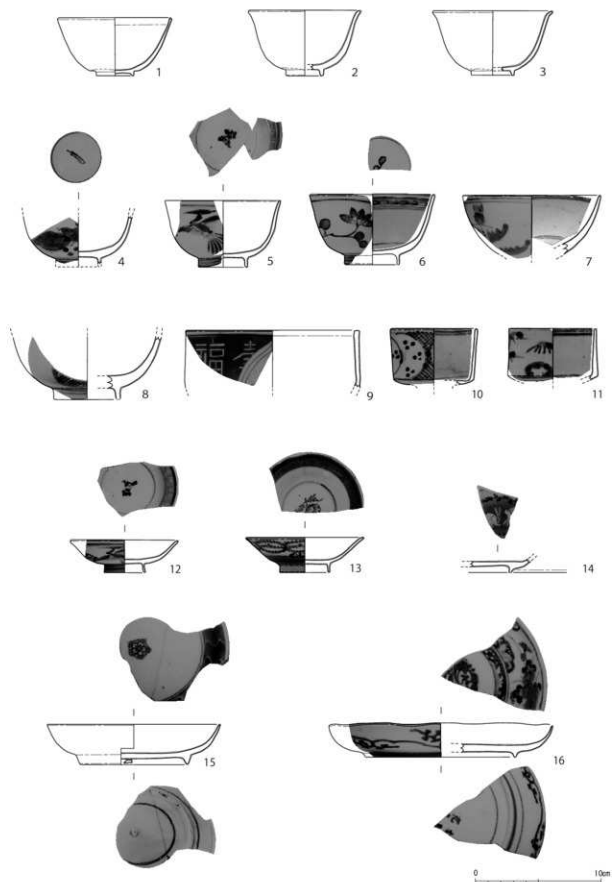
第5図 SD01 土層実測図 (1/50)

3. 出土遺物

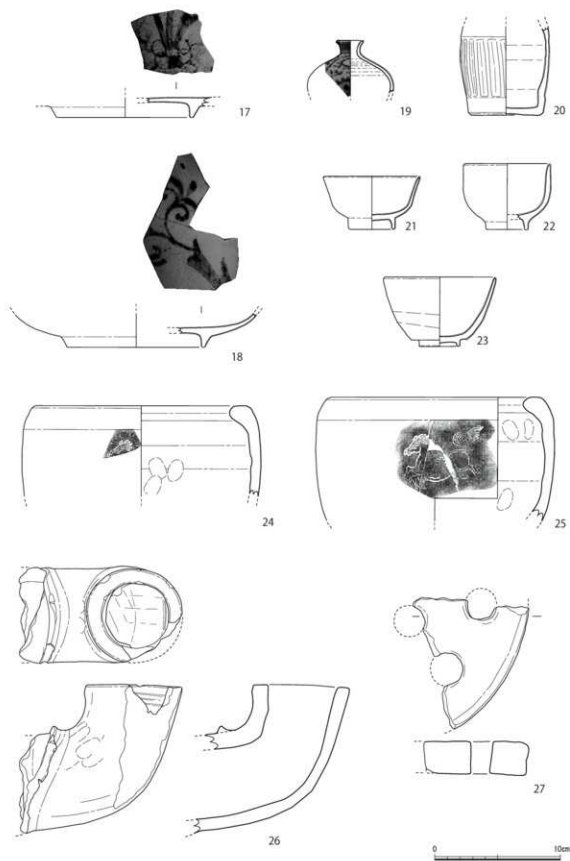
SD01 (第6～11図)

陶磁器 (1～23, 28～33) 1～3は磁器碗。1は外面に鉄絵で文様を施すが、詳細は不明。2・3は内外面に貫入がみられ、口縁部は端反する。いずれも高台は露胎。4～8、10～18は染付磁器。4～8は碗。4は外面に梅とウグイスを描く。5は外面に鳥、口縁部内面に雷文を描く。見込みに植物を描くが、カブか。6は外面に草花文を描く。見込みも同様の文様を描いたものと思われる。7は外面にアザミを描く。8は底部の破片資料。文様の詳細は不明。9は磁器色絵碗。口縁部釉掻き取り。外面に「福寿」の文字を書く。10・11は筒形湯飲み碗。10は外面に円文と宝文、斜格子文を描く。11は外面に笹を描く。12・13は小皿。12は外面に鳥、口縁部内面に雷文、見込みに花文を描き、5と同じ文様で構成される。13は外面に蔓草つなぎ文、口縁部内面に雷文、見込みに花文を描く。14～18は磁器皿。14は皿の底部破片資料。内面にウサギを2隻描く。15は内面に墨弾きによる曲線文、見込みに五弁花を施す。外面高台内にハリが附着している。16は外面に唐草、内面に菊花などの植物を描く。見込みに五弁花を施す。17は内面に草花文を描く。灰色の胎土で灰白色の釉がかかる。18は内外面に唐草を描く。17と胎土・釉ともに似るが、別個体の資料。19は油壺。菊唐草を描く。20は肥前の青磁灰落とし。外面はタテケズリを施す。

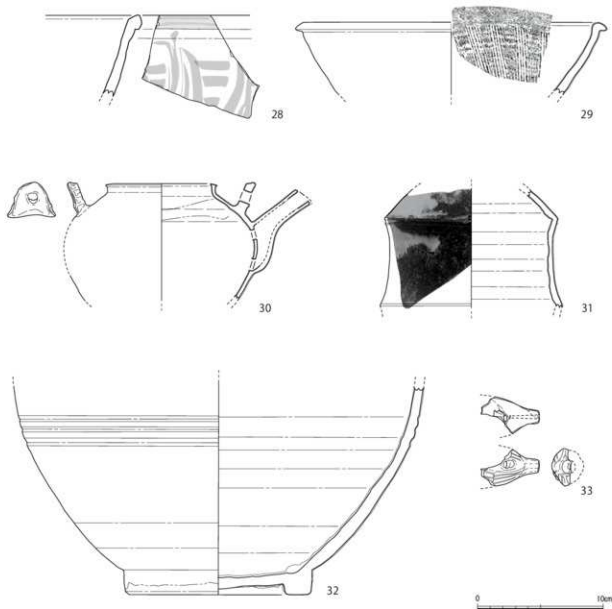
21～23は陶器碗。21は透明釉がかかる。22は口縁部から胴部上半にかけて、青色を帯



第6図 SD01 出土遺物実測図① (1/3)



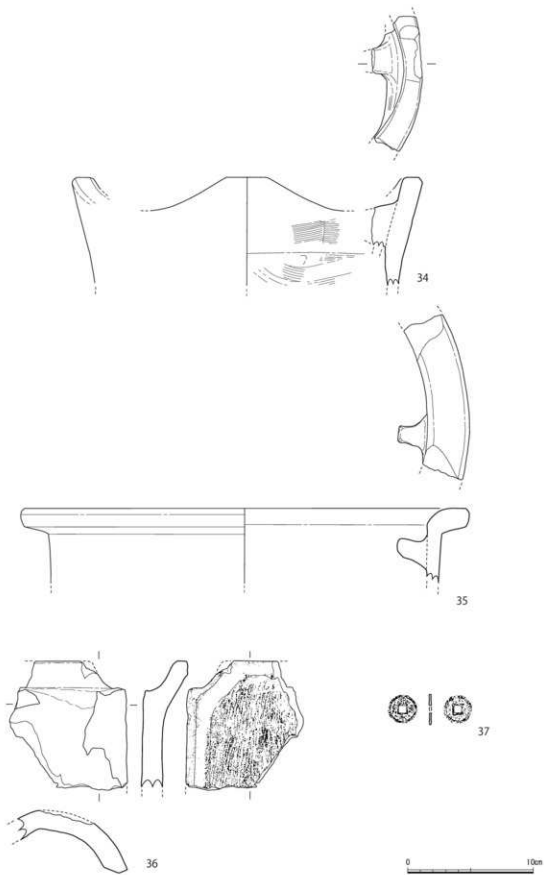
第7図 SD01 出土遺物実測図② (1/3)



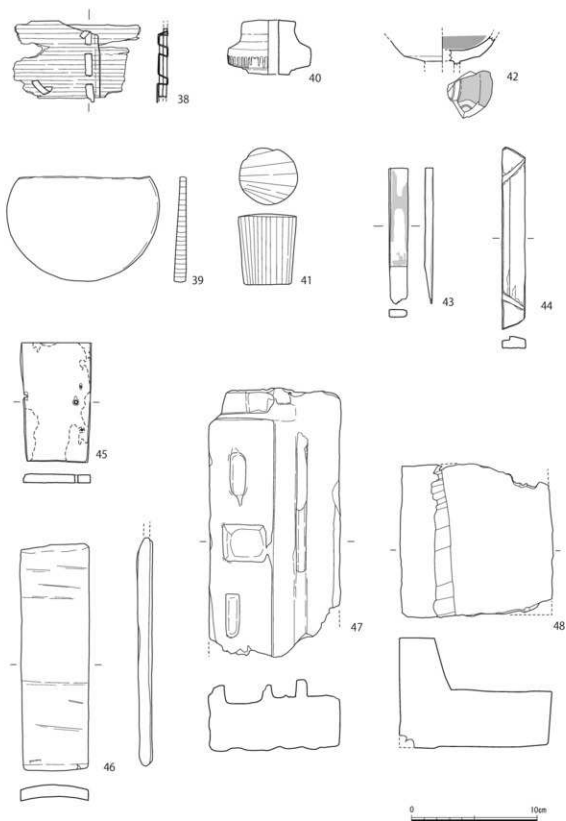
第8図 SD01出土遺物実測図③ (1/3)

びた釉を施し、その後透明釉を全体に施す。畳付の釉掻き取り。23は天目形を呈する。高台は露胎。28は陶器皿。赤茶色を呈した器胎に白色の釉を施す。29は陶器挿鉢。口縁を玉縁状につくるもので、内面には4条1単位の挿目が施される。30は土瓶。外面に胎釉の上に藁灰釉を施す。31は陶器瓶でいわゆる竹節形瓶。胎釉の上に一部藁灰釉を厚く施す。32は大型の鉢。タタキ成形。外面には胎釉の上に藁灰釉を施し、内面には透明釉を施す。畳付は釉掻き取り。見込みと高台外面に砂が付着する。33は陶製の笛でモマ笛か。型合わせ目部から下部が残存している。

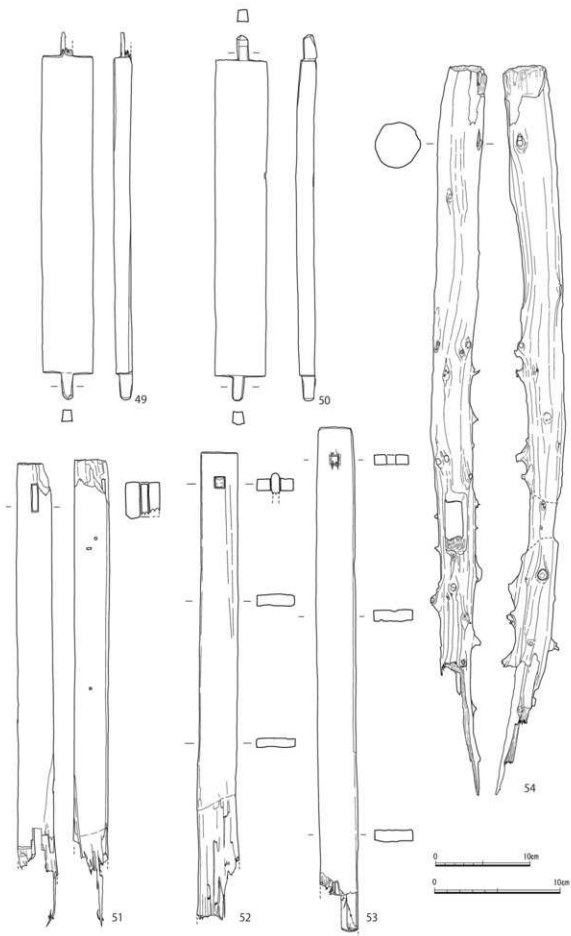
土師質土器 (24～27・34) 24・25は手焙り火鉢。いずれも外面は平滑に磨かれ、内面は横方向のナデが施される。ともに外面に左向きの麒麟がスタンプされており、同一のスタンプを用いたものと考えられる。接合しなかったものの同一個体である可能性もある。26は筒状土



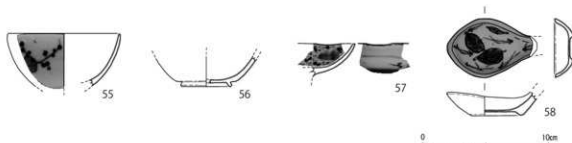
第9図 SD01 出土遺物実測図④ (1/3)



第10图 SD01出土遺物実測図⑤ (1/3)



第 11 図 SD01 出土遺物実測図⑥ (49・50 は 1/3、その他 1/4)



第12図 SD02 出土遺物実測図 (1/3)

製品。内面には煤が濃く付着する。煙突の根本部分か。27は七輪のサナ。上面は被熱しており、煤が付着している。34は七輪。体部は二重構造になると考えられる。口縁部は富士山形の波状口縁となり、内面波頂部直下には突起を有する。突起より上側の内面には、煤が付着する。

瓦質土器 (35) 35は七輪。外面は平滑に磨かれる。

瓦 (36) 36は軒丸瓦。凸面はヘラナデ、凹面は布目痕が残る。

銭貨 (37) 37は寛永通宝である。調査地上層より出土。

木製品 (38～54) SD01の下層では多くの木製品が出土した。38は榎目材を用いた曲げ物の側板。薄板に切れ目を入れて、桜の皮で留めている。39は榎目材を用いた曲げ物の底板。40は番傘の頭。傘の骨をつなぐ支点部分にあたる。41はタル栓。全面を丁寧に面取り、加工している。42は漆器椀。外面は黒漆、内面は朱漆の漆器である。外面に紋が入るが、詳細は不明である。43は榎目材を用いた板材で、一方の面を削る。黒漆が全面に塗られている。44は榎目材を用いた板材。ハの字状に切り込みを入れ、上面の1/3部分には段を設ける。45は榎目材を用いた板材。墨痕によるものか、黒色を呈する。釘穴が4ヶ所確認できる。46は榎目材を用いた盥の板材。タガの痕跡が確認できる。47は敷居またはサッシ枠の部材。溝は2本残る。ほぞ穴は正方形を呈するものが1つ、その左右に長方形を呈するものが2つ確認できる。48は心材に近い部分を用いた部材。全面面取りを行う。用途は不明である。49・50はいずれも榎目材を用いた板材で、上端部・下端部にほぞを持つ。両側からの加工でほぞの部分を作りあげる。大きさ、形態ともによく似る特徴を持つ。51～53は榎目材を用いた板材で、いずれもほぞ穴を持つ。51のほぞ穴は2ヶ所確認でき、長方形を呈する。上部のほぞ穴には、ほぞがはまったままの状態出土した。また釘穴が3ヶ所確認できる。52は正方形のほぞ穴を持つ。ほぞがはまったままの状態出土した。53は榎目材を用いた板材で、正方形のほぞ穴を持つ。54はほぞ穴を持つ杭。面取りなどの加工はなされず、丸太を枝打ちして用いる。

SD02 (第12図)

陶磁器 (55～58) 55・56は磁器椀。55は外面に梅を描く。56は内外面に透明釉を施す。高台は露胎。57は磁器皿。内面に唐草と花、外面に唐草を描く。58は散蓮華。折れ葉松と葉文を描く。

第1表 遺物観察表①

遺物番号	種類	図録	出土地点	法量(m ² ・g) (①:白土の重量・②:磁石の重量・③:磁石の重量・④:磁石の重量・⑤:磁石の重量・⑥:磁石の重量)	形態・技法・文様の特徴	A:粘土 B:鉄質 C:黒色	備考
1	磁器	梅	S001 埋土	①(9.2) ②(4.6) ③(3.0)	内面～体部外面下位施釉 外面段状文様あり	A:粘土 B:良好 C:釉5Y7/2 黒白色 釉跡5Y7/1 黒白色	
2	磁器	梅	S001 埋土層	①(9.0) ②(5.2) ③(3.0)	内面～体部外面下位施釉 内外面貫入あり	A:粘土 B:良好 C:釉2.5Y8/2 黒白色 釉跡1.0Y8/2 黒白色	
3	磁器	梅	S001 埋土層	①(9.6) ②(5.1) ③(3.4)	内面～体部外面下位施釉 内外面貫入あり	A:粘土 B:良好 C:釉5GY8/1 黒白色 釉跡1.0Y8/2 黒白色	
4	磁器	染付陶	S001 埋土	②(3.7)	内外面施釉 外面輪とツグイス文あり	A:粘土 B:良好 C:釉5GY8/1 黒白色 釉跡2.5Y8/1 黒白色	
5	磁器	染付陶	S001 埋土	①(9.2) ②(5.25) ③(3.95)	内外面施釉 体部外面段状文あり ①:磁石の重量文あり 見込み花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0G7/1 明青灰色 釉跡9Y8 黒白色	
6	磁器	染付陶	S001 埋土	①(10.0) ②(5.6) ③(4.4)	内外面施釉 体部外面見込み草花文あり	A:粘土 B:良好 C:NB/ 黒白色	
7	磁器	染付陶	S001 埋土層	①(11.0) ②(4.7)	内外面施釉 体部外面アザメの花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0GY8/1 明緑灰色 釉跡5Y8 黒白色	
8	磁器	染付陶	S001 埋土層	②(4.9) ③(5.3)	内外面施釉 体部外面文様あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0GY8/1 明緑灰色 釉跡5Y8 黒白色	
9	磁器	色紙陶	S001 埋土	①(13.8) ②(4.6)	内外面施釉 体部外面福寿の文字あり	A:粘土 B:良好 C:NB/ 黒白色	
10	磁器	筒型陶	S001 埋土	②(7.0) ③(4.4)	内外面施釉 外面門文と宝文・斜格子文あり	A:粘土 B:良好 C:釉2.5GY8/1 黒白色 釉跡1Y8/ 黒白色	
11	磁器	筒型陶	S001 埋土	②(7.0) ③(4.1)	内外面施釉 外面竹文あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0Y8/1 黒白色 釉跡1Y8 黒白色	
12	磁器	皿	S001 埋土層	①(8.6) ②(2.6) ③(3.4)	内外面施釉 体部外面段状文あり ①:磁石の重量文あり 見込み花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉5BG7/1 明青灰色 釉跡5Y8 黒白色	
13	磁器	皿	S001 埋土層	①(9.5) ②(2.8) ③(4.0)	内外面施釉 体部外面草つなぎ文あり ①:磁石の重量文あり 見込み花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0GY8/1 明緑灰色 釉跡5Y8 黒白色	
14	磁器	皿	S001 埋土	②(1.1)	内外面施釉 内面2本の点文あり	A:粘土 B:良好 C:釉5GY8/1 黒白色 釉跡5Y8 黒白色	
15	磁器	皿	S001 埋土層	①(13.8) ②(3.2) ③(8.6)	内外面施釉 内面曲線文あり 見込み花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉5G7/1 明緑灰色 釉跡5Y8/1 黒白色	高台内への付着
16	磁器	皿	S001 埋土層	①(17.8) ②(2.7) ③(12.0)	内外面施釉 体部外面草文あり 内面草花文あり 見込み花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0GY8/1 明緑灰色 釉跡5Y8 黒白色	
17	磁器	皿	S001 埋土層	②(1.6) ③(10.9)	内外面施釉 内面草花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉2.5Y8/2 黒白色 釉跡5Y8 黒白色	
18	磁器	皿	S001 埋土層	②(2.7) ③(10.0)	内外面施釉 内面草花文あり	A:粘土 B:良好 C:釉2.5Y8/2 黒白色 釉跡5.3Y8/1 黒白色	
19	磁器	漆塗	S001 埋土層上層	①(2.2) ②(4.2)	口縁部内面～体部外面施釉 外面輪状文あり	A:粘土 B:良好 C:釉1.0GY8/1 明緑灰色 釉跡5Y8 黒白色	
20	磁器	灰土なし	S001 埋土層下層	②(7.1) ③(6.0)	内面～体部外面施釉 外面ツググツグ	A:粘土 B:良好 C:釉1.0GY8/1 明緑灰色 釉跡2.5Y7/1 黒白色 釉跡7.5Y6/2 黒白色	
21	陶器	梅	S001 埋土	①(7.8) ②(4.2) ③(3.7)	内外面施釉	A:粘土 B:良好 C:釉2.5Y8/2 黒白色 釉跡1.0Y8/2 黒白色	
22	陶器	梅	S001 埋土層	①(7.0) ②(5.25) ③(3.0)	内外面施釉	A:粘土 B:良好 C:釉1.0G7/1 明青灰色 釉跡1.0Y8/2 黒白色 釉跡1.0Y8/2 黒白色	
23	陶器	梅	S001 埋土層	①(9.0) ②(5.5) ③(3.2)	内面～体部外面施釉	A:粘土 B:良好 C:釉5Y8/2 黒白色 釉跡1.0Y8/1 黒白色 釉跡1.0Y8/1 黒白色	
24	土師質土器	水鉢	S001 埋土層	①(17.5) ②(7.2) ③(19.0)	外面ツググ 内面磨サセ後エッジコナテ 外面磨跡のスタンツ文あり	A:黄褐色の点状網目 雲母を含む B:良好 C:内外面5Y8/4 に近い褐色	口縁部内面磨跡あり
25	土師質土器	水鉢	S001 埋土層下層	①(17.4) ②(9.8) ③(19.0)	外面ツググ 内面磨サセ後エッジコナテ 外面磨跡のスタンツ文あり	A:黄褐色の点状網目 雲母を含む B:良好 C:内外面10Y8/3 に近い黄褐色	口縁部内面磨跡あり
26	土製品	筒型土製品	S001 埋土層下層	①(7.6) 最大厚8.1	外面平ナテ 内面磨サセ 内面平ナテ一部上縁あり	A:②mm以下の点状網目 粘土 雲母を含み中々多く含む B:良好 C:内外面5Y8/4 に近い褐色～ 7.5Y8/1 黒白色	内面～外面上縁磨跡あり
27	土師質土器	土輪(平ナテ)	S001 埋土層下層	径(22.0) 厚(2.7) 孔径(2.5)	平ナテ面	A:②mm以下の点状網目 粘土 雲母を含み中々多く含む B:良好 C:5Y8/3 に近い褐色～2.5Y8/4 赤褐色 ②.5Y8/1 赤褐色	上面磨跡あり
28	陶器	皿	S001 埋土	②(6.4)	内外面施釉 外面文様あり	A:粘土 B:良好 C:釉7.5Y8/1 黒白色～7.5Y8/1 黒白色 釉跡2.5Y8/4 赤褐色	
29	陶器	平丸鉢	S001 埋土層下層	①(24.8) ②(5.75)	内外面施釉 内面縁1.5単位の間隔あり	A:粘土 B:良好 C:釉7.2Y2/3 明緑灰色 釉跡2.5Y8/4 赤褐色	
30	陶器	土盤	S001 埋土層下層	①(8.8) ②(9.3) ③(14.6)	内外面施釉	A:粘土 B:良好 C:釉7.5Y3/3 明緑灰色～10Y8/2 明緑灰色 釉跡5Y8/4 に近い褐色	

第2表 遺物観察表②

遺物番号	種類	図録	出土地点	重量(mg) (中心部と周囲との重量差を測定し、最大・最小(最大・最小)を算出)	形態・技法・文様の特徴	A:粘土 B:焼成 C:色調	備考
31	陶器	瓶	S001 最下層	①(9.4) ②(14.6)	内外面施釉	A:焼成なし白色顔料を含む B:良好 C:胎①/2 輪胎赤褐色→10YR7/3 土赤黄褐色 胎②/3 胎③/4 土赤黄褐色	竹節形瓶
32	陶器	鉢	S001 下層	①(17.0) ②(14.8) ③(32.0)	内外面施釉 9.9×9.9cm形 外面中央部に文様が施す	A:焼成なし白色顔料を多量に含む B:良好 C:胎①面①/1(4.赤褐色)→胎②面②/2 胎赤褐色 胎③面③/4 土赤黄褐色	見込みと異なる 外面付付着
33	陶製品	モウサ	S001 最下層	残存径2.5 残存幅4.6 最大径1.5	施釉 穿孔あり	A:粘土 B:良好 C:胎7.5YR7/6 褐色 胎7.5YR8/4 土赤黄褐色	
34	土師器土器	土輪	S001 埋土	①(27.8) ②(8.0)	内面ヘラメ捺子 外面ミナギ	A:③面以下の白色顔料、石灰、焼成を伴わない 胎① C:胎①面①/1(赤褐色)→胎②面②/1 黄褐色 胎③面③/4 土赤黄褐色	C:胎①面①/1 胎②面②/1
35	瓦質土器	土輪	S001 土層	①(35.7) ②(5.95)	外面ミナギ	A:焼成なし白色顔料、石灰を含む B:良好 C:胎②面②/1 黄褐色→胎③面③/1 褐色 胎④面④/1 褐色	C:胎②面②/1 胎③面③/1
36	瓦	軒瓦丸	S001 土中下層	残存径10.2 残存幅9.3 厚21.7	内面ヘラメ捺子 内面有目紋	A:焼成なし白色顔料、石灰、焼成を伴わない 胎① C:胎①面①/1(赤褐色)→胎②面②/1 黄褐色 胎③面③/4 土赤黄褐色→胎④面④/1 褐色	C:胎①面①/1 胎②面②/1
37	銅製品	鏡筒	S001 最上層	径2.3 厚21.5 重さ2.3g	鍍金鑑定		
38	木製品	曲げ物	S001 最下層	残存径6.1 最大幅10.0 厚20.6	板の皮を紐として使用		
39	木製品	曲げ物	S001 最下層	径6.1 幅12.0 最大径9.9			
40	木製品	漆塗り	S001 最下層	①4.3 ②5.6 上層④4.3 下層③3.4	塗漆		
41	木製品	9.6枚	S001 最下層	①5.6 上層④4.6 下層③3.7	全面面取り加工		
42	漆器	椀	S001 最下層	①(2.2)	内面赤漆、外面黒漆塗布 外面段入り		
43	木製品	板材	S001 最下層	全長10.8 幅1.5	全面黒漆塗布 一方の面を削る		
44	木製品	板材	S001 最下層	全長14.9 幅1.8 厚20.9	八枚の割れ目、上面の1/3に目を削げる		
45	木製品	板材	S001 最下層	全長9.5 最大幅5.65 厚20.7	割れ目? 釘跡あり		
46	木製品	箸	S001 最下層	残存径18.1 幅5.85 厚20.9	9.9の痕跡あり		
47	木製品	漆塗り	S001 最下層	残存径20.8 幅10.5 最大径2.3	溝2本あり		
48	木製品	漆塗り	S001 最下層	全長12.1 幅1.21 最大径8.7	全面面取り加工		
49	木製品	板材	S001 最下層	全長29.2 幅4.1 厚21.4			
50	木製品	板材	S001 最下層	全長29.0 幅4.1 厚21.4			
51	木製品	板材	S001 最下層	残存径49.0 幅3.6 厚23.4	釘跡あり		
52	木製品	板材	S001 最下層	残存径49.5 幅4.05 厚21.25			
53	木製品	板材	S001 最下層	残存径53.5 幅4.1 厚21.2			
54	木製品	杖	S001 最下層	全長77.22 幅4.75 厚24.8			
55	漆器	椀	S002	①(9.0) ②(4.2)	内外面施釉 外面輪花文あり	A:粘土 B:良好 C:胎10C9/1 黄褐色 胎1.2.5C9/1 褐色	
56	漆器	椀	S002	①(2.4) ②(4.0)	内面一様面外施釉	A:粘土 B:良好 C:胎7.5Y7/2 黄褐色 胎1.2.5Y7/2 黄褐色	
57	漆器	皿	S002	①(2.7)	内外面施釉 外面唐草文、内面花唐草あり	A:粘土 B:良好 C:胎7.5C9/1 黄褐色 胎1.7N9/ 黄褐色	
58	漆器	漆塗椀	S002	①(1.85) ②(残存径7.15 最大径4.7)	内外面施釉 内面折右腰止と葉文あり	A:粘土 B:良好 C:胎8N9/ 黄褐色 胎1.7N9/ 黄褐色	

IV. 総括

雑餉隈遺跡が所在する一帯は、江戸時代に博多から太宰府・二日市・甘木などの宿を経て、日田へ至る街道として整備された「日田街道」沿いに開けた集落「雑餉隈」に相当する。雑餉隈は、博多宿と二日市宿の間に位置し、「間の宿」として茶屋や宿が並び、人々の往来も多かったと考えられている。また安永年間（1772～1781年）には、藩が「御茶屋」を設けたことでも知られている。

（1）各調査地点の様相

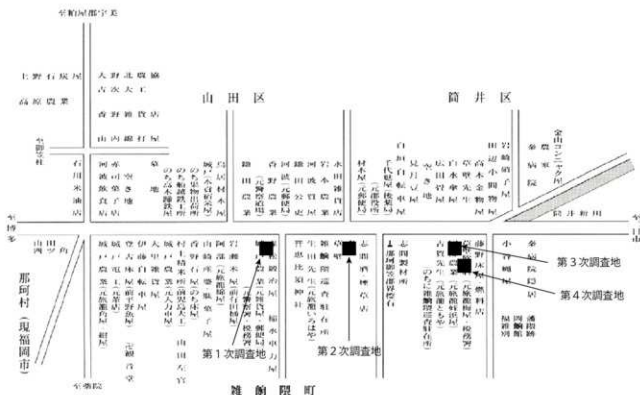
雑餉隈遺跡では、これまで3回の調査を実施している。第1～3次調査地点は、いずれも日田街道沿いに位置する（第3図）。奈良時代の遺構が確認されているものの、主体は近世の遺構で構成されている。江戸時代の陶磁器や瓦などが出土し、いわゆる「くらわんか碗」や見込みの五弁花文を施すもの、京焼風陶器といった肥前産陶磁器が多く出土している。第2次調査で出土した特徴的な遺物は、「VOC」銘を有する磁器皿である。「VOC」は「オランダ東インド会社」の略章として知られる。通常長崎出島を経由して主にヨーロッパへ輸出されるもので、雑餉隈集落と長崎出島の関連を検討するうえで興味深い。第3次調査では、瓦の出土量が多いことに着目し、先進性の高い宿場的・町屋的な雑餉隈集落の景観を復元している。

（2）新川と集落景観

新川は、日田街道沿いに流れていた運河である。朝倉地域からの年貢米などを、陸路運搬より労力の少ない水上運搬をすることを目的につくられた。寛文期に持ち上がった計画は、朝倉地域から福岡城下まで運河を開くことであったが、開削時の岩石が多く、多大な労力と経費がかかることから工事は中止されている。寛延期の計画では、運河の区間を二日市から博多川端まで短縮し、工事を実施している。しかし、寛延4（1751）年に運航を開始するも、水量が乏しいことから十数年で廃止され、埋め戻された記録が残っている。

本書で報告する第4次調査地点は新川想定地にあたる。調査の結果、大溝（SD01）の東岸を検出した。土層観察の結果、中層から下層は大溝を埋めるように堆積し、上層は全体を平らに整地するように堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高いことがわかった。遺物としては、肥前産陶磁器や瓦、木製品などが出土した。陶磁器の年代は、「くらわんか碗」など18世紀後半のものが主体となるが、上層では近代の遺物も出土しており時期幅は大きい。以上のような埋没状況や遺物の年代、調査区の位置関係から、SD01は新川である可能性が高い。

先述したとおり、雑餉隈集落は「間の宿」として、宿や茶屋が軒を連ね築いていた集落である。本調査地点は、旅籠（梅屋・姪浜屋・ともや）3軒が並んでいた裏手にあたり、また、向かい側には御茶屋（福岡藩雑餉隈別館）があった場所である。主要な出土遺物は「くらわんか碗」などの大衆向けの磁器で、旅籠との関連がうかがえる。また本調査地でも瓦が散見され、建築部材も多く出土していることから、雑餉隈集落の特徴である宿場的な景観が広がっていたことがわかる。その他曲げ物や番傘の頭、タル栓など、当時の人々の生活に密接に関わる木製品が多く出ており、当時の生活を復元するうえで重要な遺物といえよう。



第13図 昭和初期ごろの雑餉隈町・山田・筒井の町並と調査地点(赤司2002を一部改変)

(3) 第3次調査で確認された落ち込みと平坦面の位置づけ

第3次調査では、幅6m以上、深さ2m以上の落ち込みを確認している。埋土からは近代の遺物が出土した。この落ち込みは新川であることが示唆されており、本調査地との位置関係や規模から見ても新川の可能性が高い。

本調査地で確認したSD01は、長さ6m以上、幅5.9m以上、深さ3m以上を測る。深さ1mほど緩やかに傾斜したのち、幅1m程の平坦面が存在する。第3次調査では平坦面は確認されず、平坦面は新川の一部にのみ造られたことが想定される。平坦面の機能としては、船着き場や通路のような役割、地山の砂質土の崩壊を防ぐためなど様々な可能性が考えられる。江戸時代に記された『博多津要録』には新川における川舟運賃表が記載されており、その中に雑餉隈の文字がみえる。船着き場が雑餉隈にあったことは間違いないだろうが、現時点で本調査地の平坦面が船着き場と断定することはできない。今後の周辺調査の成果に期待したい。

溝跡の位置づけについては、朝岡俊也氏に多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 赤司岩雄 2002 『大野城市巡杖記 山田・雑餉隈・栄町・下筒井・上筒井区編』
 大野城市教育委員会 1974 『大野城市の文化財 第6集 新川特集号』 大野城市教育委員会

圖 版

(1) SD01 掘削状況
(北から)



(2) SD01 掘削状況
(北から)



(3) SD01 木杭検出
状況 (北から)



図版 2



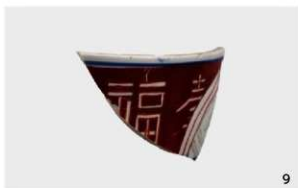
(1) SD01 掘削状況
(北から)



(2) SD02・SX01 土層
(南から)



(3) 御茶屋門柱現存状況
(北から)



図版 4



SD01 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざっしょのくまいせき							
書名	雑餉隈遺跡3							
副書名	第4次調査							
巻次	3							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第207集							
編著者名	齋藤 明日香							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2023年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北韓 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
雑餉隈遺跡	福岡県大野城市 錦町 1丁目17番1・3	402192		33° 32' 26"	130° 28' 24"	2021年 12月2日 ～ 2021年 12月24日	70㎡	住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
雑餉隈遺跡 第4次調査	集落	江戸	新川跡	陶磁器 木製品				
要約	雑餉隈遺跡は、市域北部に位置し、Aso-4火砕流堆積物に起因する微高地を中心に展開している。調査対象地は、日田街道沿いを流れていた近世の運河である新川跡にあたり、東岸を確認した。出土遺物の大部分は18世紀代で、比較的まとまった量の陶磁器や木製品などが出土した。当該地は、雑餉隈集落の一角にあたり、宿場と宿場の中間に位置する「間の宿」として栄えたことが知られている。							

大野城市文化財調査報告書 第207集

雑餉隈遺跡3

令和5年3月31日

発行 大野城市
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
〒848-0035 佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5

圖
繪
限
造
路
3



大
野
城
市
文
化
財
源
查
報
告
書
第
四
集

大
野
城
市